Vol. 4
2015年
春・夏号

上町台地 今昔タイムズ

企画・編集：U-CoRoプロジェクト・ワーキング　発行：大阪ガス エネルギー・文化研究所（CEL）
問合せ先：tel.06-6205-3518（担当：CEL弘本）※U-CoRo=ゆーころ（上町台地コミュニケーション・ルーム）
http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/ucoro/index.html

「上町台地 今昔タイムズ」とは

わたしたちが暮らす“上町台地”。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しい都市化も経験しました。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってきます。自然の恵みとリスクのとらえ方、人とまちの交わり方、次世代への伝え方…。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに、U-CoRoプロジェクト第2ステップでは、壁新聞「上町台地　今昔タイムズ」を制作いたします。

文画人・堤楢次郎が見つめた大阪
上町台地をかたどった水辺の風景と土地の記憶

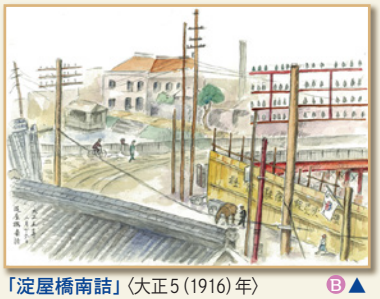
東には河内平野に実りを運んだ川とため池の数々が、西には城下町の賑わいを支えた堀川が、上町台地の輪郭を際立たせ、大阪の発展を支えてきました。明治・大正・昭和を生きた、稀有な記録画家のまなざしを手掛かりに、未来への記憶を呼び覚ましましょう。

■ 水辺から大正・昭和の大阪を描く

近世の名残をとどめていた明治の大阪が、やがて大正から昭和へと、一気に拡大していった時代を、堤楢次郎は日本画と文で誠実に記録しています。注目したいのは、「大大阪」と呼ばれた時代の表面の華やぎにスポットを当てるのではなく、むしろその繁栄を下支えしている生業や交通のありようや、発展の一方で失われていく身近な風景こそ、描き留めるべき対象と定めているところです。激変するまちの風景の最前線が、間違いなく上町台地を挟んで、水都・大阪の水辺のそこここに広がっていたのでしょう。楢次郎が描いた水辺の風景から、移り変わっていく時代の空気まで伝わってくるようです。

22歳の頃の堤楢次郎

「月」〈大正7（1918）年〉Ⓐ▲
東区大川町（現在の北浜4丁目あたり）のビルの屋上から描かれた絵と思われます。この付近は当時、大阪の金融・商業の中心地として栄えていたところ。瓦屋根の商家が建ち並ぶ中に、洋風の住友総本家の建物も見られます。


「淀屋橋南詰」〈大正5（1916）年〉Ⓑ▲
市電の開通にともない淀屋橋は赤い鉄橋に架け替えられました。左上に見えるのは日本銀行で、右上の赤い鉄枠は「仁丹」のイルミネーション。

「東横堀 丸町の浜にて」〈大正4（1915）年〉Ⓒ▲
東横堀川の「本町の曲がり」付近を描いたもの。このあたりの川の両側には染め物屋（捺染工場）が並んでいました。川で染め布を洗い、風が干し場の染布をなびかせる光景は、初夏の水都の風物詩だったそうです。

■ 記録画家・堤楢次郎の歩み

明治29（1896）年、大阪・旧鶴橋村味原池近く（現天王寺区味原）に生まれる。

大正4（1915）年、大阪画壇で評価を得、大阪・高島屋美術部に勤務。この頃から鶴橋・猪飼野と周辺の風景を、精力的に描き始める。20代で、旧鶴橋町猪飼野（現東成区玉津）に移り住み、当時の大阪画壇の大家、山口草平や久保井翠桐に師事。24・5歳頃に書道家のアサコと結婚。1930年代から旧鶴橋町木野（現生野区桃谷）で印刷業を営む。戦後は、牧村史陽の佳陽会に入会。郷土史研究とともに、「大阪百選」「鶴橋、猪飼野5部作」等を描く。昭和58（1983）年、87歳で永眠。

大正から昭和にかけ、激変する大阪のまちと暮らしの記録に力を注いで、300点を越える貴重な作品を後世に遺した。とりわけ生まれ育った地への眼差しは温かい。

【凡例】
- 本紙に掲載の堤楢次郎氏の作品は、『鶴橋・猪飼野画集−文画人・楢次郎が描いた大正・昭和時代の鶴橋・猪飼野の世界』（小野賢一 2011年）、『日本画家・楢次郎が描く大正・昭和時代の水都・大阪−川から眺めた街』（小野賢一 2013年）に収録されたもののなかから、上町台地の東西の印象的な風景が描かれたものを選んでいます。
- 作品の掲載については、作品継承者（直系の孫）・堤條治氏のご承諾を得ています。
- 作品のタイトル・時期、描かれた場所や時代についての解説等は、堤楢次郎氏本人が書き残した説明書きや調査をもとに、猪飼野探訪会の足代健二郎氏・小野賢一氏が中心となってまとめられた研究成果（上記文献など）によるものです。文中、堤楢次郎氏の敬称は略しています。

「大阪工廠（城東練兵場にて）」Ⓔ▶
〈昭和4（1929）年〉
戦前までは、大阪城の周辺一帯には、大阪砲兵工廠と呼ばれる一大軍事工場群が広がっていました。楢次郎は川向こうの工場群を練兵場の方から描いたようです。

「明治晩年の小橋 及付近」Ⓓ▲
画面の右下を走る城東線の蒸気機関車。右が北で、上町台地東側の小橋付近が俯瞰で描かれています。堤楢次郎が生まれたのはこの近く。産湯稲荷神社の北には味原池がまだありました。「桃山」「桃谷」などの地名とゆかりある桃畑のほか、茶畑や梅畑、草地などが広がっていた様子も描かれています。

＊背景地図は大正15（1926）年発行の「イロハ引早わかり大大阪市街新地圖」（地図中の赤い太線は市電網。また、元地図上に平野川と猫間川の当時の流路を青く明示。●は絵が描かれた場所、赤線囲みは関連地名）

上町台地をかたどった水辺の風景と土地の記憶

■台地の東に広がる沃野と暮らしの変貌～堤楢次郎のまなざしを追って

堤楢次郎が、生まれ育った鶴橋・猪飼野周辺の風景を記録し始めたのは、ちょうど今から100年ほど前のことでした。「大大阪」の開発の足音とともに、慣れ親しんできた田園風景が、宅地と工場が建ち並ぶまちへと変貌を遂げようとするとき。現在は暗渠の猫間川や、川筋を変えた平野川の旧の姿がまだ見られ、西に上町台地、東は遥か生駒山の麓を見渡せるまでに沃野が広がっていました。日常の風景が、刻々と近代化していく様子を、楢次郎のまなざしと、その時代に育った方々の思い出でたどります。これから100年後へのヒントが、残されているように思えてくるのです。

＊背景地図は大正15（1926）年発行の「イロハ引早わかり大大阪市街新地圖」（地図中の赤い太線は市電網。また、元地図上に平野川と猫間川の当時の流路を青く明示。●は絵が描かれた場所、●はコメント内の場所、赤線囲みは関連地名）

「私の思い出」昭和10年代
水路はあちこちあって、今の今里の水道局と保健所のあたりにも道に沿って川が流れていた。友達で、そこに、じゃこ（小ブナなど）を捕りに行って落ちて、今の丸一橋❶の下まで流された子がいた。暗渠になっているところを通って出てきたのを、交番所から巡査が駆けつけて助けてもらった。
大沢荘一さん（昭和6年、旧南中道町生まれ）

「私の思い出」昭和10年代
ぼくらが泳いだのはだいたい平野川の運河❷（新平野川）。でも、どの川でも、水は割ときれいでした。ホタルも、初夏にちょいちょい見ました。捕るほどいたわけでないけれど、「あ、ホタル飛んでるわ」といった感じ。夏にはオニヤンマなど大きなトンボもたくさん捕れました。
大沢荘一さん（昭和6年、旧南中道町生まれ）

「私の思い出」大正～昭和10年代
子ども時分から、猫間川❸は石垣で組まれていて、整備されていました。川はだいぶ下で、あの川には入ったことはありません。青年の頃は、その川沿いの道を歩いて、昔は玉造にまでよく遊びに行っていました。玉造には映画館や芝居小屋があって、にぎやかでしたよ。
沢田正夫さん（大正3年、旧鶴橋町木野生まれ）

「私の思い出」大正～昭和初頭
私の子ども心に残っているのは、木村権右衛門さんの大邸宅の前の堤。平野川❺に沿って、小路※❼の方から猪飼野村まで、ぐるっと土手が続いていましたよ。そこを何メートルか降りんと水辺に行けません。なだらかな土手にずうっと草が生えていて、その下に平野川がありました。
沢田正夫さん（大正3年、旧鶴橋町木野生まれ）

「私の思い出」大正～昭和初頭
父が、猫間川❸と線路の間の土地をお借りして、小作でお米と野菜を作っておりました。そのあたりはずうっと田んぼ。幼かった頃、畑に親を何回か呼びに行った記憶はあるんです、お父さんもうご飯ですよと。もう少し大きくなった頃は、もう、あたりには家がけっこう建っていました。
沢田正夫さん（大正3年、旧鶴橋町木野生まれ）

「平野川　東成郡鶴橋町の北端（三枚橋）」〈大正4（1915）年〉Ⓕ▲
一面に広がる田んぼのなかを流れる旧平野川。そこに板を3枚組み合わせた橋が架けられています。左端の家屋は玉造駅近くにあった二軒茶屋と記されています。その後の耕地整理で、あたりは一気に市街化していきました。

「私の思い出」大正～昭和初頭
私らの子どもの時分に、猫間川❸のところに牧場がありまして、その一帯の東側に、「蓮池」❹と呼んでいましたが、蓮のきれいな花が咲きますでしょ、そういう池がたくさんありました。あの辺はこのあたりでも低い場所で、雨がたくさん降ったりすると、よく水に浸かってましたな。
沢田正夫さん（大正3年、旧鶴橋町木野生まれ）

「亀の橋（平野川）」Ⓖ▶
〈大正13（1924）年〉
画家として世に出た頃、楢次郎はこの橋の付近に住んでいたそうです。このあたりから北東に流れていた旧平野川に架かっていた亀の橋。行き交う人々の様子に、当時の暮らしがうかがえます。現在、親柱だけ民家の脇に遺されています。

◀Ⓗ「猫間川」〈昭和7（1932）年〉
現在は暗渠になっている猫間川の川べりで、30代半ばの楢次郎は印刷屋を営んでいたそうです（中央「名刺はがき」の看板の店）。川の手前には牧場があり、そこから見た対岸の様子を描いています。

「私の思い出」大正～昭和初頭
私のもっと上の世代の子は、鶴の橋❻の際から水に飛び込んで遊んだそうです。上流の小路※❼のあたり（御勝山の東側）は、川が狭くて深かったのですが、そこの橋から飛び込んで、流れに乗って、ぐるっと鶴の橋のところまで来た。そこになると川幅も広く、流れも緩やかでした。
猪甘俊教さん（大正12年、旧鶴橋町猪飼野生まれ）
※小路は、昔の猪飼野村字小路。現在の勝山北5丁目あたり。

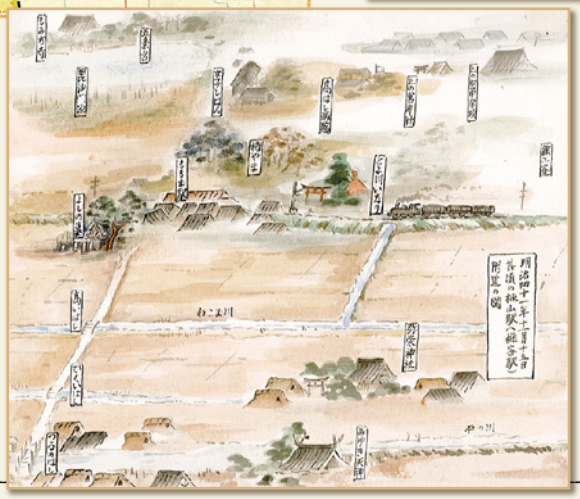
「私の思い出」大正～昭和初頭
猪飼野村には、旧の平野川沿いに大きな家があって、その間に川に続く道もありました❻。堤さんの絵のように、そこで洗濯もしていたようです。絵の中の左の屋敷は造り酒屋で、舟で酒の原料を運んで来ており、屋敷裏に水門があって、庭の中に石段の荷揚げ場もありました。
猪甘俊教さん（大正12年、旧鶴橋町猪飼野生まれ）

◀❶「平野川 鶴之橋一丁北」〈大正5（1916）年〉
鶴の橋は猪飼野の旧平野川に架かっていた橋。この絵はそこから100メートルほど北の風景。水際に降りる道があり、きれいな川水で洗い物もできました。

「私の思い出」昭和10年代
私らが小学生のときには、運河❽（新平野川）ができて、もう旧の平野川には水が流れていませんでした。その川の跡地に、鶴の橋❻の石の欄干も残っていましたし、橋の横には河原に降りる石段もありました。現在の「つるのはし跡公園」❻には、この親柱が保存されています。
村井敦朗さん（昭和9年、旧鶴橋町猪飼野生まれ）

「私の思い出」昭和20年
昔の平野川はもう埋まっていましたが、戦時中は鶴の橋❻のそばに防空壕があったので、空襲の時はそこに逃げ込みました。3月13日の大阪大空襲のときは、疎開道路に消防車が全部避難してきていたのを覚えています。そこから四天王寺の五重塔が燃え上がっているのも見えました。
村井敦朗さん（昭和9年、旧鶴橋町猪飼野生まれ）

「城東線 桃谷駅」〈大正8（1919）年〉Ⓙ▲
上町台地の東縁と猫間川の間を走っていたこの鉄道線は、当初は私鉄で、国有化された後の明治42（1909）年に城東線と改称されました（現在はJR大阪環状線）。昭和7（1932）年からの工事で順次高架化されていく以前の駅の様子を描いています。



◀Ⓚ「明治41年 その頃の桃山駅（桃谷駅）付近の図」
〈明治41（1908）年〉
上町台地の麓を南に走る蒸気機関車。その後方には毘沙門池から細工谷まで、台地東側の様子が描かれています。手前に広がる農村の風景のなかに、北流する猫間川やそこに流れ込む水路、弥栄神社と御幸森天神宮の間を流れる昔の平野川と「つるのはし」も描かれています。